

平成二十七年年度 岡山大学 国語

問題一

問一	(ア)	蓄積	(イ)	根幹	(ウ)	統制	(エ)	体系
問二	世界の起源や歴史的進展を説明するためのロジックは、神々を主体とする神話的なものであったが、青銅器文化から鉄器文化へと進化し都市文化が拡大するにつれて、より理性的な原理や人間の本性をもとにしたものへと変化した。							
問三	魂とは、「生きているもの」すべてが生命の原理として持っているものであり、生命の維持の働きを担うと同時に、人間においては、精神的な機能にも直結しているものである。							
問四	「氣」が目に見える現象、「形而下」の世界の説明原理であるのに対して、「理」はその背後の論理的原理、「形而上」の世界の原理である。							
問五	日本の靈魂観の理論的の中核は、土着の思想に加えて、インドや中国由来の伝来思想の混入があるために混沌としていて、はっきりとした理解をもつことは困難だから。							

問題二

問一	「弘晃の姿が胸に応える」という主観を交えた表現から、路男の視点を通して語られていることがわかる。			
問二	ぎこちない音が柔らかな音へ、さらに軽やかな音色になったという変化は、路男の計らいで無心に包丁を扱っているうちに、父親を刺すかもしれないという極度の緊張と不安が次第に消えて、晴れやかな気分になったことを示すものだから。			
問三	弘晃の手えが覚えよった			
問四	取り敢えず、祖父の大きな愛で自分を認めてもらい、自分の気持ちの強張りをほどいて前に向いていく力を補うという意味。			
問五	独り住まいで、孫との心的距離も近く保ち続けることが困難な現状から、寂しさは禁じえないが、力強く前向きになった孫の様子に安堵と嬉しさを感じ、また自分自身も改めて一歩踏み出そうという明るい気持ちさが反映されている。			

平成二十七年 岡山大学 国語

問題三

問四	問三	問二	問一		
			(イ)	(ロ)	(ハ)
自分が都を去るとまします行き届かない暮らしになるだろうと今後の姉妹の生活を案じている。		(カ) お礼を申し上げなされる	(ニ) 再びは到底あり得ないのではないか	(イ) 源氏さまがわざわざ夜更けに訪ねていらして、妹の花散里を人並みに思ってくださいって	
				(キ) 世間をはばかって	(ロ) もう一度会わないならば、花散里も自分を薄情だと思うであろうか
(一) で花散里は光源氏にここにいてほしいというつらい気持ちを訴え、(二) で光源氏は澄んでい るはずの月がしばらく曇るように、自分の身の上にしばらく陰りが生じているが、須磨から帰り、 最後には都で一緒に住むことができるので、曇る空を眺めて嘆かないでほしいと慰めている。					

問題四

問四	問三	問二	問一
			劉邦はどのような徳があつて榮え、諸葛亮はどのような罪があつて志半ばで死んだのか。
様々な結果は、物事の善悪功罪とは関係なく、天の前では自然に起こるものである。	A	なほひとのありにおけるがごときか。	
	賞罰		
	B		
	功禍		